◆２００９年　３月

八木健選 「七句」・・・ (鑑賞も五七五)

１．　ののののの薇の野ののののの　佐藤古城

ほほほほほ穂芒のほほほほ　なんかどう

２．　何十年皺のよらない雛飾る　安藤淑子

皺のよる人を羨むひひなかも

３．　妙齢がその意味を問ふ犬ふぐり　可知豊親

妙齢が案外カマトトだったりで

４．　寒紅の唇からちくりちくりかな　壽命秀次

寒紅のちくりちくりに冴えかえる

５．　中古機にそれぞれの癖農具市　髙田敏男

トラクタの暴走癖はご勘弁

６．　蛇穴を出て焼酎の瓶の中　中沢荘荷

蛇穴に入る焼酎の瓶の口

７．　節分や仕事の鬼が早仕舞　長島唯男

ワークシェアリングか節分の鬼も

青山桂一

起こされし田で立幅跳びの寒鴉
春耕や鳥従へしトラクター

秋月裕子

春風によろめき歩くポストまで
探梅に失なつて知る人の恩
春嵐昭和遠のく早さかな

麻生やよひ

テナーすぐ悲鳴となるや猫の恋

足立淑子

一抹の不安覚えている遅日

易々と二足の草鞋茂吉の忌
ご器量はいまいちなれど風邪知らず

有吉堅二

呑兵衛の墓にちよつぴり雛あられ
猫は恋人は欠伸の一ト日かな
春雨やこの傘差さうか止めようか

飯塚ひろし

尼寺の裏に売るほど雪残る
横丁を肩で風切る孕み猫
主の死知らずに戻りうかれ猫

井口夏子

地球儀を廻す旅なり春うらら
春うらら百円ショップの浪費癖
ただいま女房早寝のすきま風

稲沢進一

熱燗はちびちびワインはごつくんと
踏まれても朝また立つ霜柱
目立たない人で居たくてサングラス

今城夏枝

猫柳一皮むけて獣めく
包丁を睨みつけたる眼張かな
おぼろ夜のテレビドラマに涙せり

奥脇弘久

不揃ひの玉子特売春立ちぬ
二ン月の仲見世通り江戸探す
たすき掛け鰆を捌く三代目

可知豊親

柊を猫に届かぬやうに挿す
渾身のギャグに一家の冴返る
妙齢がその意味を問ふ犬ふぐり

草薙一朗

猫の恋破れて鈴木澄子かな
右左いづれが本当内裏雛
その美髯イエスに似たり社会鍋

桜貝老いらくの恋進みけり
草餅をつまみ迷つているメタボ

安藤淑子

何十年皺のよらない雛飾る
タンシチュウ胆と舌とを勘ちがい
地蔵さま鼻みず垂らす寒の雨

井口寿々子

奔放な若者に似しかいつぶり
この道をゆきつもどりつ四温かな
牡丹雪ふと蛇の目傘欲しくなり

伊藤浩睦

雑草に戻る八日の薺かな
三寒に山間の校参観日
鴨鍋を突つき論じる野鳥保護

井野ひろみ

民宿やまづ出迎は雪だるま
たわむれに雪投げし合う露天風呂
パンを買う行列長し着ぶくれて

越前春生

山笑ふ俳句の鬼となりきれず
春ショール粧ひ下手の戦中派
羊羹で酒呑む人と梅見かな

笠　政人

目出度さの眼玉いただく桜鯛
孫の名を唱へて七つ蕗のたう
空腹を吹かれてて又紙風船

川島智子

初場所や朝青龍の逆人気
春琴抄の佐助眼を突く針供養
携帯もパソコンもなく長閑なり

工藤泰子

水玉のおんころころと春兆す
いりこ屋に女の群れる着膨れて
たんぽぽの舌出してゐる頭花かな

倉方　稔

農道へベンツを停めて麦を踏む
レコードの溝はひとすぢ春小川
梅園も一方通行人の列

小杉　隆

触れなればや寒月一閃和剃刀
歯刷子をくわえのつそり朝の梅
焼いもと言ひ張る爺や薩摩焼

佐治洋一

真似するなと言うも上さん大くさめ
あちこちでくさめ伝染朝電車
テレビ老ひ色気の消える余寒かな

佐野ゆきこ

感謝して仏の供物食べ肥り
食事中箸八の字に子はトイレ
今初老出世望まずともすぐ大老

柴田真一

冬ぬくし惚け俳句にはよき境地
春装やカラージーンズが好み出す
企業いま御前会議やちんちろり

首藤虎男

草野球バンド盗塁方目討ち
不況で笑い渦潮瀬子たのみ
高金利千手手品師立消える

白井道義

猫被り猫なで声の恋の猫
カツ丼をぺろりと平らげ受験の子
医師に背を向けて丸腰冴返る

鈴木和枝

大根ぶ厚く煮る孫の受験日
冬草引つこ抜くこんな所に神が
急な石段願いごと背負つてます

髙田菲路

あられなく脱ぎたるさまや花疲れ
ほほゑむは雪女郎かも終着駅
抱きついてくれて女生徒卒業す

黒田忠一

虎落笛一度も吠えず去りにけり
涅槃図を撫でたら釈迦に叱られた
盗み酒炬燵に隠し寝込みけり

桜井宇久夫

燗酒のあてなくパンの耳ちぎる
針供養いざと刺し込む大豆腐
建国日先祖は何の命やら

佐藤古城

雛段の端に唐子の姉おとうと
ののののの薇の野ののののの
身八口を探る赤子や花むしろ

佐野萬里子

うどん派の私チャーシュー菜の花と
雨続き力漲る花の枝
薄氷やわかさぎ釣飾溺れたる

清水呑舟

左遷にも添ひ来しコート捨てられず
師の句碑を建てる足しにと磯菜摘
春雷にはたと歌止む厨妻

壽命秀次

寒紅の唇からちくりちくりかな
正統にはくしよんと嘘女高生
ノーメーク隠すずぼらのマスクかな

杉村福郎

仏手柑は宇宙人からもぎし掌か
鬼の面つけて豆撒してゐたり
梅の花ぐつと開いて髭はやし

鈴木　清

三日月に星二つ寄る笑顔かな
のぼり子が下るを競う御燈祭
タヌキ顔フォックスフェイスの品定め

高橋　都

声ひそめ大人三人鬼は外
壊手太宰治を読みし日は
地下鉄の白昼夢われ雪女

高橋素子

お豆腐にいかなる罪や針供養
ガイドするつもり先行く寒鴉
付き纏ひ挙句居座り春の風邪

田代青波

使ひ込み縮んで老のマスクかな
チュー天閣キス割引バレンタインデー
嫁が君排水ホース咬みしあと

田中章子

ふらここの空から降れる子らの声
ごそごそと雛のいる町音のする
煮目張の大きな眼に目をそらし

飛田正勝

掴み取り足で押える鬼やらひ
山笑ふどすを利かせる京都弁
春隣後部座席の犬の顔

長井知則

寒の朝脈打ち痛む六十肩
稜線や仄かに明し寒の窓
散歩道帰りは邪魔な貼るカイロ

永島唯男

節分や仕事の鬼が早仕舞
花の兄愁眉を開く如く咲く
のびのびになりたる野火の火を放つ

西　をさむ

建国記念日国会議事堂五里霧中
寒戻る猫と添い寝の体たらく
春泥を跳んで齢に気付きけり

原田　曄

とるものもそこそこにして春の猫
春雪や行くも返すも地獄坂
横綱の打つ豆拾ふ子鬼かな

久松久子

鮟鱇や男は顔で決められぬ
非通知の深夜の電話雪女郎

田代青山

探梅の鶯ボールきりもなし
死んだふりしてをりバレンタインデー
隣る尻舐む蛤の舌ピンク

髙田敏男

中古機にそれぞれの癖農具市
負け越しの力士散歩や土匂う
婆ちやんに雛の歳聞く童かな

種谷良二

婚活の旅に出にけり猫の恋
春風邪と花粉のワンツーパンチかな
地球から押し出されゐる蕗の薹

戸谷笑子

節分の鬼の土産や恵方巻
福は内古女房の在しけり
杉の花人涙して薬笑ふ

中沢荘荷

蛇穴を出て焼酎の瓶の中
地虫出てすぐクラクション聞きにけり
不器用な男にムツゴロ捕へらる

畷　崇子

メモをとるそのメモどこに置いたつけ
親友はカバンに付けたキティーちやん
うぐいすは立春過ぎて猛練習

根岸敏三

二股の捨人参の味の良さ
ぜんまいの数多ありしやのの字の句
右巻きも左巻きあり春疾風

彦阪義久

妻はグー杉花粉パー吾はチョキ
腕上げて三寒四温の親爺ギャグ
由良之助春はまだかを見て参れ

日根野聖子

節分や鰯の顎開ききる
心身のこはばり解け寒の明け

金縛りの法術かかる枯蟷螂

広瀬遊亀男

薄氷や帳尻合わぬ恋であり
手抜きの手覚られぬよう鬼遣らう
どの虫も光沢を誇りにいまデビュー

藤田昭義

平穏や毒持つ毛虫毒吐かず
子子や泥鰌似なるが天を知る
糞をするその分だけは働けや

藤原セツ子

暖房の待合室に腰据える
柚子の湯の香りや湯気となり遊ぶ
庭の隅そこもよかろう落椿

堀川亮二

寒木瓜の惚けにはあらず咲きにけり
春雷の寝起きの山をど突きけり
啓蟄や魚の目二つ老躯にも

前川敏夫

長生きをし過ぎましたと亀鳴けり
ワイン酌む梅に白赤そしてロゼ
豆打つややさしい顔の鬼もあり

松尾軍治

昔より三十郎は椿なり
ロシアより愛をこめてとタラバガニ
不条理やカフカ変身虫となり

丸山紘一

老ひ二人だんまりのまま屠蘇交わす
春場所や悪役頼みの国技なり
五十路経て光頭も居るクラス会

三橋一笑

雛の間奇つ怪な物に掃除され
春めくや床屋の看板ぐるぐるり
式場を出て来る制服つんつるてん

虫倉蝉音

凍てる夜隣りも羊数へをり

春菊の香や垂直に立ちゐたる

藤岡蒼樹

老木の梅や投げキスごと閑か
日向ぼこ飴玉の解けゆきにけり
悴める指や崩るる写経文字

藤森荘吉

通院は一日仕事余寒まだ
針供養豆腐供養もしたくなる
山笑ふ一緒に川も笑ひ出す

星加克己

舌噛みぬ同じところを狸汁
木の葉髪降るにまかせて鼻毛つむ
八階の宙に住まひて鮃食ふ

坊野留吉

外出して連れて戻りぬ春の風邪
玉入れは笛を待つのみ散る椿
球春の侍ジャパン人の渦

松井　勉

面の皮測る術なし林檎剥く
初日の出のみが愛でられ夕日かな
雪月を撒き終へ雲の向く南

松田吉憲

姥捨の山真つ先に眠りけり
長生きの骨は寝ること十夜婆
日脚伸ぶ隣へ行つたきりの妻

三木蒼生

鯛焼はゲートボールのミニ懐炉
返信のやうな二通目賀状来る
国会中継はた昼寝中継

無患子

雪を踏む音静寂に入りゆく
紅梅のうれいのあわき花ひらく
金粉の目やに付けいる初化粧

むつみ

春の雹漢字検定襲いたり

ぼんやりが持ち味春の丸い月
芽吹かずに六十二歳春遅し

村上美和

下萌や犬がご主人連れてゆく
白梅のみどりしたたる蕾かな
賽銭を守る四温の座牛かな

諸中昌之

鍋奉行灰汁代官も居て楽し
デジカメの腹ふくらます我は片栗
朧から拳骨を出す空手技

柳澤京子

共感の滑稽俳句春うらら
鮪ずし招きはスターのプロマイド
バレンチョコ卑しげ夫の下痢嘔吐

山下正純

寡黙なりバレンタインの勝負顔
お守りの束の絡むや受験生
冴え返り井戸端の椅子泣きいたる

山本けい子

イケメンの箸ふぐ刺を掻き掬ふ
おちよぼ口のままに笑はぬ寒のばら

横山喜三郎

寝だめして帰りし春のバス旅行
花疲れ短き脚を投げ出せり
愛着のじやまする整理春うらら

春の風邪防犯カメラ気になりて
植木市美人に弱き値札かな

百千草

もういいかい後ろの正面春来たる
恋の猫なり歴戦の面がまへ
余生とはかく永きもの春の虹

森　要

福豆を食べきれぬほど年喰らい
鬼は外ババヌキできず俺も外
豆まきで孫に負かされ鬼となる

山岡冬岳

新社員社長の息子でありけり
新社員茶髪に変へて出勤す
また元の茶髪に戻り新社員

山本あかね

セーターから首抜く時の春の闇
気に入りのパゴダのやうな春帽子
あいちてるよと恋猫になりて言う

山本　賜

泥葱のたじろくほどの安さかな
庭に切る髪を切るごと黄水仙
駅員のマスクの声の良く透る

吉田恵子

少年は大志を抱く猫柳
かばの尻動かぬままや春の風
広辞苑重くてならぬ春炬燵